

大雪山国立公園の動植物

大雪山国立公園にそびえ立つ山々や深い森には、実に多様な珍しい種や固有種が生息しています。この辺りに育つ約 250 種の高山植物の多くがこの地域の原産です。暖かくなると、優美な高山性の花々が山腹に咲き誇り、在来種の蝶が集まってきます。公園の山麓の丘は深い森が覆っており、シマフクロウや甲高い声で鳴く丸い耳をしたキタナキウサギという小型の哺乳類をはじめ、珍しい生き物が生息しています。

植物と蝶

大雪山の山麓の丘は、エゾマツやダケカンバの木で覆われています。極度に寒い気候のため、大雪山の樹木限界線は日本のどこよりも低くなっています。春や夏になると、樹木限界線の上に高山性の花々が咲き、山腹がカラフルに彩られます。

7 月頃になると、受粉後にピンクに代わる黄色のツツジや、白い花びらのチングルマ(バラ科ダイコンソウ属)のコロニーを目にすることができます。7 月中旬には、ピンクのコマクサ(コマクサ属)が砂利の隙間から顔を出し、薄紫色のオソバウルップソウ(細葉得撫草)が花を咲かせます。青いエゾオヤマリンドウ(リンドウ科リンドウ属)が夏の終わりを告げ、旭岳の西側の傾斜部にある姿見の池周辺に咲き誇ります。

公園のあちこちに広がる牧草地には花が咲き乱れ、半透明で黄色い羽根のウスバキチョウや複雑な模様のアサヒョウモンといった珍しい高山の蝶が集まります。これらの種は、日本の他の場所では見ることはできません。

動物

タイリクモモンガ、エゾオコジョ、ユキウサギなどの小型の哺乳類が、大雪山の森や山腹には棲息しています。涼しい岩に覆われた傾斜部では、氷河期からの生き残りで丸い耳を持つウサギ目の小型の哺乳類、キタナキウサギの甲高い鳥のような鳴き声が時折聞こえてきます。

大雪山には、日本最大の陸生動物であるエゾヒグマが数多く棲息しています。春から秋にかけて活発になり、8月から9月にかけて餌となるクロマメノキ（ウラジロナナカマド）を求めて山麓の丘から標高の高い場所へと移動します。高原温泉のヒグマ情報センターでは、エゾヒグマについて学ぶ機会が用意されています。事前にクマの安全に関するレクチャーに参加すれば、情報センターから続く沼コースをハイキングすることができます。英語のガイドも予約可能で、ガイド付き散策ツアーでは、安全な距離からヒグマを観察できる場合があります。

鳥

大雪山には、世界で最も大きく珍しい種の1つであるシマフクロウが棲息しています。滅多に見ることができないこの夜行性の生物は、川の魚を捕って食べます。北海道に何千年も暮らしてきたアイヌの

人々の間では、神として崇められています。森の奥深くに棲む他の住人には、黄色い頭のミユビゲラやエゾライチョウ、小さなキンメフクロウなどがいます。

ギンザンマシコ、ホシガラス、カヤクグリなどの鳥は、樹木限界線より上のハイマツの近くで比較的容易に見つけることができます。オスのギンザンマシコは鮮やかな赤色の羽が特徴で、ホシガラスは、白い斑点がある濃い茶色の羽で見分けることができます。夏の高山性の花々が咲き乱れる牧草地の近くでは、ノゴマを目にすることができます。オスは、鮮やかな紅色の喉が特徴です。